

重要文化財 一字蓮台法華經 二卷

如来神力品第二十一

紙本墨書

縦二十八・八纏 橫一〇一・〇纏
界高二十三・九纏 界幅一・〇纏

囑累品第二十一

紙本墨書

縦二十八・八纏 橫六十六・二纏
界高二十三・九纏 界幅二・〇纏

京都国立博物館蔵

日本の古写経の中では『法華經』八卷二十八品ほど夥しく書写され、種々に裝飾されたものはない。『法華經』法師品には「是諸經之王」^{注1}と説くが、古写経に於ても『法華經』は「諸經之王」^{注2}たるにふさわしい。

この『法華經』がいつわが国に齎されたかは明らかではない。しかし早くに聖德太子（五七四一六二二）が『法華義疏』^{注3}を著していることから、かなり早い時代に伝来していたことが窺えよう。奈良時代には、聖武天皇（七〇一～五六）が天平十三年（七四一）に勅を出し、諸国に僧寺（国分寺）と尼寺（国分尼寺）を創建せしめることになった。

如來神力品第二十一

「金光明四天王護國之寺」と名づけられた僧寺には紫紙金字『金光明最勝王經』が、「法華滅罪之寺」と名づけられた尼寺には紫紙金字『妙

法蓮華經』が奉安されたのである。

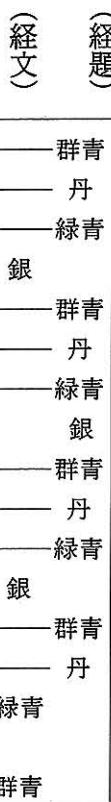
このような『法華經』に対する信奉は、最澄（七六七一八二二）の出世によつて一層拍車がかかることになる。最澄は延暦十七年（七九八）十一月に比叡山で法華十講を始め、同二十二年には和氣氏が開催した高雄神護寺の法華經講会（高雄天台会）に講師の一人として招かれている。そして延暦二十三年に入唐、天台の地に詣でて帰朝し、比叡山に於て『法華經』を正依の經典とする日本天台宗を開くのである。その後、円仁・円珍が出て天台の法流を盛んにした。特に円仁（七九四一八六四）は如法經の始修者とされる。

また十一世紀半ばには末法の世に入るとき、これらの仏教の情勢に呼応しつつ、法華信仰が貴族社会に浸透していくと思われる。もちろん『法華經』の教説自身がもつ魅力、つまり譬喻が多く説話性に富んでいること、女人成仏を説くこと、經典護持の功徳を説くこと、現世利益を説くことなどが重要な要因になつたことも見逃せない。

『法華經』は、六万九千三百八十四文字より成り立つてゐるといわれる。その一字、一字を一仏に見立て、それぞれを蓮台に載せて書写した経巻がある。「一字蓮台經」と呼ばれるものがそれで、本館には法華二十八品のうち「如來神力品第二十一」と「囑累品第二十一」との二品（いずれも八巻本では巻七所收）を守屋コレクション中に所蔵している。

斐紙に銀泥で界を引き、淡墨で蓮弁を描いて彩色を施した後、一行十七字詰に經文を書写している。蓮弁は、各行の初めより群青、

丹、緑青、銀泥の順にくり返して彩色される。ただし、銀泥は一行ごと、交互に白描と銀泥の彩色がある。



経文の書体はやわらかみを帯びながら、一点一画をゆるがせにしない謹厳な楷書で、平安時代後期と思われる書風である。ただ興味深いのは所々で異なる字体を用いて同一の漢字が書かれていることである。例を挙げれば、次のような。

・世尊分身所在國上滅度之処…

・如説修行所在因上若有受持…

・優婆夷天龍夜叉乾闥婆…

・其中衆生天龍夜叉乾闥婆…

・此娑婆世界無量元邊百千万億…

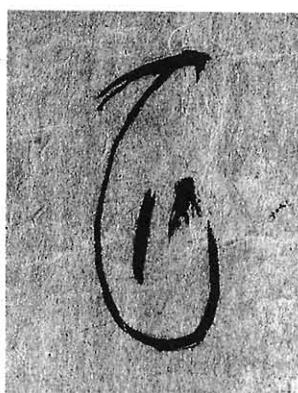
・諸佛神力如是無量無邊不可思議…

・人非人等一切眾前…

・摩訶薩及諸四衆恭敬…



(挿図1 拡大2.8倍)



(挿図3 拡大2.4倍)

このように異なった字体が用いられたということは、原本がそうであつたというよりも、かなり凝つて経文が書写された結果と見てよいのではないか。経文自体は、如来神力品の長行の部分のみで、それに続く偈頌十六偈を欠いている。また紙継ぎで一紙目の方が上になつていることや、紙背にある花押がさかさまになつていることから(挿図1)、料紙の上下を逆に使用してしまつたと思われる。

嘱累品第二十二

斐紙に銀泥の界を引き、淡墨の蓮弁を描き、一行十七字詰に経文を書写した後、蓮弁に彩色を施したと推察される。墨の上に顔料が乗つているところもあるが、文字の部分を避けるかのように彩色されているところが多くある。



(丹 拡大1.6倍)



(緑青 拡大1.6倍)

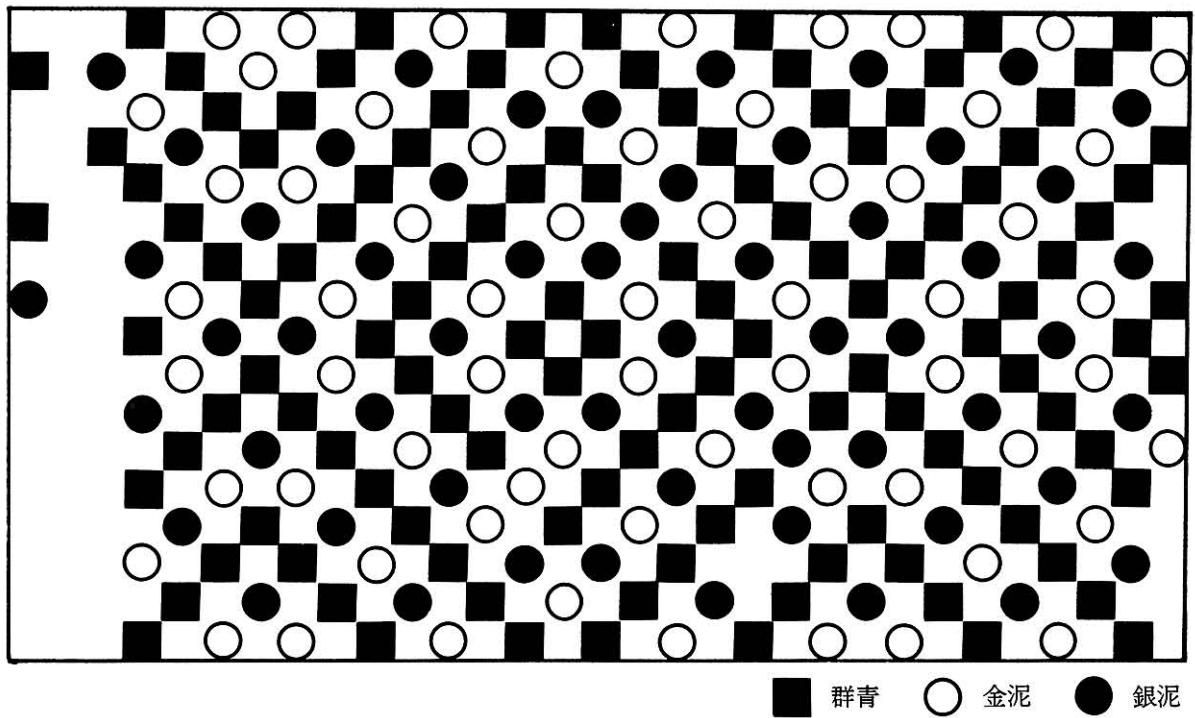
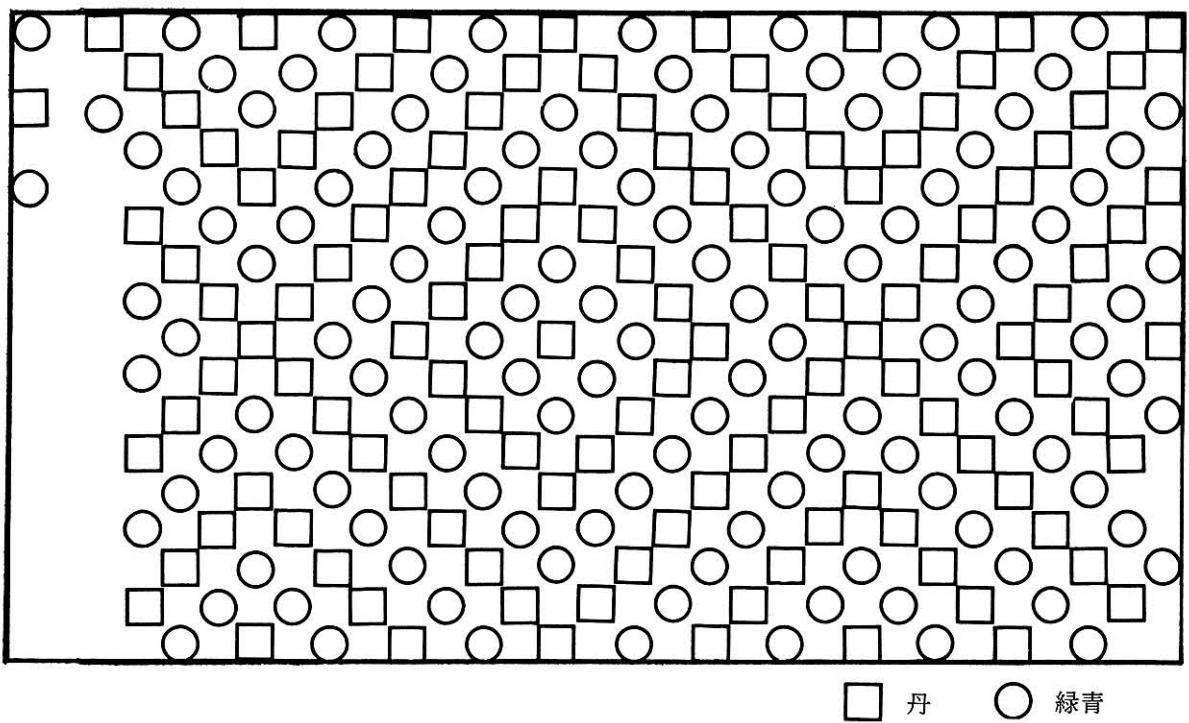


(群青 拡大1.6倍)



(金泥 拡大1.2倍)

彩色には、丹・緑青・群青・金泥と剥落して確認はできないが銀泥と思われるものの五色を使用している。彩色の織りなす模様は前の如来神力品より複雑になつており、丹を中心とした菱形模様の間を緑青の菱形模様で埋め、更にその間を菱形模様を基調とした群青



(挿図2) 嘴累品蓮弁の配色

と金泥・銀泥と思われるもので彩色している（挿図2）。

このように蓮弁は実に丹念に彩色され、和様の能筆で書写された経文一字一字を際立たせている。経文は首尾完存している。紙背に花押がある（挿図3）。

一字を一仏に見立てて書写した『法華經』のうち、代表的な遺品と考えられるのは一字宝塔の形式をとった経巻である。

重文

一字宝塔法華經（入道心西願經）

個人蔵

重文

一字宝塔法華經

栢木・輪王寺

重文

一字宝塔法華經・觀普賢經

京都・本満寺

重文

一字宝塔法華經（一字宝塔）

長野・戸隠神社

これらはいずれも宝塔の中に経文の一字一字を書写したものであり、「見宝塔品」にある多宝仏の塔の教説を受けたものといえよう。しかし「法師品」にも

若経巻所住處皆應_下起_ニ七寶塔_一極令_中高廣嚴飾_上。不須_ニ復安_ニ舍利_。所以者何。此中已有_ニ如來全身_一⁽⁴⁾。

とあり、経巻が安置される処に七宝の塔を造るべきであると説いている。仏舎利がなくとも、塔内に「如來の全身」があるという。「如來の全身」とは経巻を意味し、その経巻を形作るものは経文の一字一句であろう。宝塔の中に経文の一字一字を書写し、奉安するといふことは、このような心ばえの表現といえよう。一字宝塔の形式は経文の一字一字をその中心に据え、「仏語」としての文字一字一字を莊嚴しようとするものである。

一方、経文一字一に対する信仰よりも経文を書写する料紙そのものの莊嚴、いわゆる料紙装飾を中心にして経文を飾ることも行な

われる。一般に「裝飾經」と呼ばれるものの大半は、このような形式のものである。その代表的な遺品が「久能寺經」であり、「平家納經」である。もちろん、これらは莊嚴の限りを尽くし経巻を飾ることによつて篤信のほどを現わそうとしたのであろうが、料紙装飾に力を入れるあまり、写經の領域を越えてしまつたようである。

一字即仏の思想を反映させた「一字宝塔法華經」と料紙装飾を中心とした「裝飾法華經」のいずれもが平安時代後期（十二世紀）の作と見られ、今の館蔵『一字蓮台法華經』は宝塔と蓮台の違いはあれ、前者の系統にあることは言うまでもない。また大和文華館所蔵の国宝『一字蓮台法華經』は、このような両者の技法を取り入れた遺品であろう。

更に経文と仏を行こと交互に配したものに善通寺所蔵の国宝『一字一仏法華經序品』がある。

写經の本来の意義は、仏陀の教法の伝持、教法の流通にあるといえよう。特に印刷術の発達しなかつた時代には、経文を書写するという行為は重要な意義をもつていた。それ故に写經の功德は高く宣揚せられ、諸經典の中にその功德を讃えていることが多い。『法華經』も例外ではない。

經典が仏陀の教えを伝える仏教聖典である以上、その経文は正しく誤りのないものでなければならない。わが国では、奈良時代の写經がその責務を負うた。しかし、ほとんどの經典が完備され、中国より版本の大藏經が齋されたりした平安時代中期以降になるとテキストとしての仏典という意味合いが薄らいでくる。そして末法の世という時代の当来とともに、写經をはじめとした作善が盛んとなる。

これらと王朝貴族の耽美趣味が一体化した時、目の醒めるような裝飾経が生み出されていく。その中心となる經典が『法華經』である。このような中で館蔵の『一字蓮台法華經』は、經文の一字一字を如來の分身と捉え、文字を「仏語」そのものとして真摯に受け留めた作品として位置づけられよう。前に名を挙げた『一字宝塔法華經』のいずれもが宝塔を描いたということもあるが、一行十七字詰という写經の伝統に則つていらない。本作品が一行十七字詰という写經の伝統に則つた意味もそこにあるといえよう。

「神力品」「囑累品」と書き手は違つても端整に書写された經文と經文本位に描かれた蓮弁、この両者が相まって敬虔な美しさをかもし出している。中でも犯すべからざる經文の莊嚴、それを強く意識しているのが「囑累品」ではなかろうか。

最後に本作品が龍興寺所蔵の國宝『一字蓮台法華經』より離れたことをつけ加えておく。

〈注〉

1 鳩摩羅什によつて訳された『法華經』の当初の形態は七巻本で、葉草喻品の後半、五百弟子受記品と法師品の初め、提婆達多品、普門品の偈を欠くものであつた。野村耀昌「中國文化と法華鑽仰史の連関—敦煌壁画及び敦煌文書を中心として—」(『法華經の思想と文化』所収の「妙法蓮華經調卷の問題」の項を参照)。

2 大正大藏經第九卷三十二頁上。

3 『叢山大師傳』(日本大藏經天台宗顯教章疏二、二五一頁～二頁参照)。

4 大正大藏經第九卷三十一頁中。

(赤尾栄慶)